

総社桜が丘II遺跡

1988

前橋市教育委員会



開発予定地全景



試掘調査



住居跡確認状況



H-1 住居跡全景



H-1
カマドと
出土遺物



1-1



1-2



1-3



1-4

H-1カマドと遺物の出土状況

序

本遺跡が所在する群馬県前橋市は、北に赤城、西に榛名山を望み、利根川の清流が中心部を流れる「水と緑」をキヤッチフレーズにした、山紫水明に富む風光名媚な都市であります。

このように、自然に恵まれた本市域には、今から約2万5千年前の旧石器時代から現在まで人々が営々と生き続けてきており、その文化遺産としての遺跡が数多く残されております。

長い歴史の中でも、特に古墳時代においては、この地域の支配者は、東国の雄として知られ八幡山古墳をはじめとした8基の国史跡の古墳のほか、中小の古墳多数を今に伝えております。

また、奈良・平安時代に至ると、大国と称された上野国の国府が現在の元経社町に置かれ、この地は政治・経済・文化の中心地として発展してまいりました。

今後も開発に伴う発掘調査の進展により、さらに本地域の古代史が解明されていくものと確信しております。

このたび、立見建設株式会社より、前橋市教育委員会へ住宅地造成分譲に伴う埋蔵文化財の取扱いについての問い合わせがあり、確認調査を実施しましたところ、遺跡地であることがわかりました。遺跡の取扱いについて関係者と協議・調整を行ないました結果、前橋市教育委員会により緊急発掘調査を実施することになりました。

発掘調査の結果、奈良・平安時代のものと推定される住居跡一軒が検出されました。わずか住居跡一軒のみの調査ではありましたが、貴重な資料を得ることができました。

最後になりましたが、この調査を実施するにあたり、物心両面にわたり援助していただきました立見建設株式会社、また発掘作業に直接従事していただきました方々に対し厚くお礼申し上げます。

本報告書が、経社町及び周辺地域の歴史を解明する一助となり、また斯学の発展に少しでも寄与できれば幸甚に存じます。

昭和63年10月31日

前橋市教育委員会

教育長 岡本 信正

目 次

はじめに	頁
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	2
III 調査の経過	2
IV 層序	3
V 遺構と遺物	4
VI まとめ	6

例 言

1. この報告書は、立見建設株式会社により総社町桜が丘地内に分譲が予定されている宅地造成地における発掘調査に関するものである。
2. 調査は、前橋市教育委員会管理部文化財保護室埋蔵文化財係が担当し、遠藤和夫・新保一美が参加した。
3. 本書の作成は、遠藤和夫・新保一美が共同討議のうえ、執筆・編集にあたった。
4. 本遺跡の略称は、62A25である。
5. 遺構の略称は次のとおりである。
H……住居跡
6. 遺構・遺物実測図の縮尺は次のとおりである。
遺構……全体図 1/800 住居跡……1/60 遺物……1/3

總社桜が丘II遺跡の位置



fig. 1 總社桜が丘II遺跡位置図

I 調査に至る経緯

昭和62年4月21日付けで、立見建設株式会社立見一彦氏より、前橋市總社町桜が丘1037番1地先(3,303m²)における宅地造成のための計画書及び表面調査依頼が提出された。同日、現地にて地形調査を実施する。現地はかつて工場があり、現在は整地がなされている。よって隣接する畠地の表面調査を実施したところ、平安時代と思われる土師片が多量に散布しており、歴史的環境及び同一番地に属する總社桜が丘遺跡等から判断して、遺跡地である可能性があると考え、試掘調査の結果を見ることとする回答を出した。同日試掘調査依頼書が提出される。これにもとづき昭和62年4月30日試掘調査を実施する。その結果、住居跡1軒と小ピットを検出し、申請者と協議・調整の上、緊急調査を実施し記録保存を図るものとする。なお、遺跡名は總社桜ヶ丘II遺跡(62 A 25)とした。

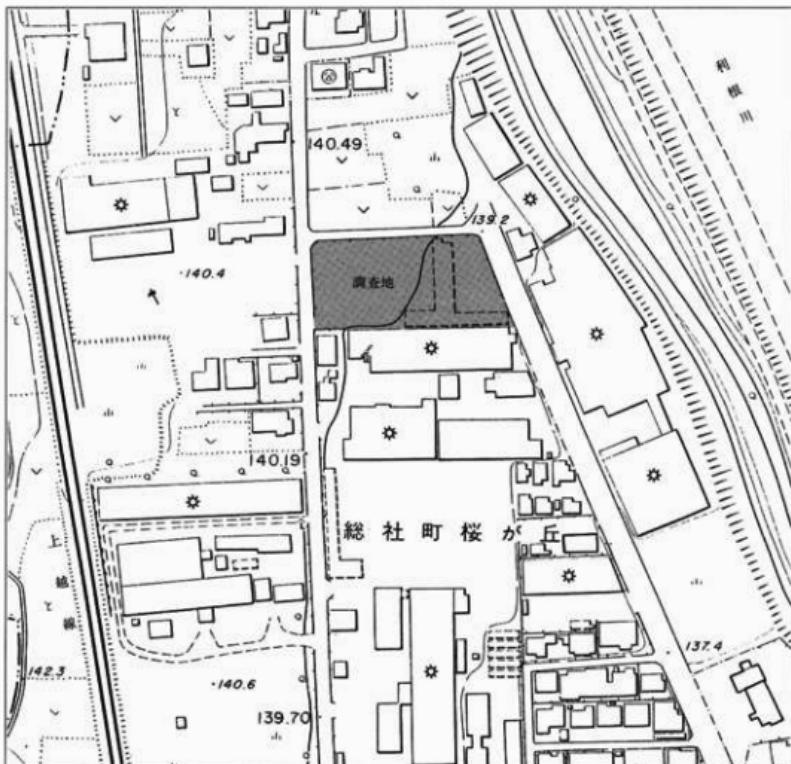


fig.2 總社桜が丘遺跡周辺図 (1/2,500)

II 遺跡の位置と環境

本遺跡は、前橋市の西北端、JR群馬総社駅より1.5km程北上した総社町桜ヶ丘1037番1地先に所在する。

総社町周辺は、榛名山麓から前橋台地への移行部にあたり、僅かな高まりの台地を形成している。この台地を、榛名山伏流水を源とする牛王頭川・八幡川などの、中小河川が東南方向に流れ、台地を細長く分断している。本遺跡は、牛王頭川下流と利根川に挟まれた舌状台地上に位置する。この舌状台地は高燥な土地で、かつては桑畠となっていた。

調査区は、利根川に面した舌状台地の東部で、利根川まで約150mの距離にある。調査区内はほぼ平坦であるが、工場建設時に大きく削平を受けている。それ以前の自然地形は、西から東に向かっての傾斜であり、北から南へ向かっての緩傾斜の始点に近い位置にあったものと思われる。

本遺跡周辺には、繩文時代から平安時代にかけて、多数の遺跡が存在する。これらを大別すると、繩文時代では、前期から後期にかけての遺物が、下東西・清里陣場・庚塚・国分境の各遺跡で若干量発見されている。また国分寺中間地域遺跡では、前期の住居跡1軒、中期の住居跡20軒が検出されている。

弥生時代では、清里陣場遺跡で環濠集落跡、国分寺中間地域遺跡で方形周溝墓、下東西遺跡で住居跡が検出されている。また、本発掘調査区南方の同一台地上においても、後期に属する住居跡が調査されている。

古墳時代には、県内でも有数の総社古墳群が存在する。同古墳群は、本遺跡からは、牛王頭川の谷を挟んだ対岸に存在し、二子山古墳をはじめとして、初現期の横穴石室を持つ王山古墳や、終末期の古墳である宝塔山古墳がある。また、牛王頭川上游には南下古墳群が存在する。

奈良・平安時代になると、本遺跡南方の総社町を中心として大きく発展し、上野国の中枢機関である上野国府跡・上野国分僧寺跡・上野国分尼寺跡・山王廃寺跡が出現する。これに伴って、周辺に大規模な集落跡が出現する。調査された遺跡としては、下東西・国分寺中間地域・柿木・国分境遺跡などがある。また、本遺跡地南方50m程の地には、総社桜ヶ丘遺跡が存在している。

III 調査の経過

昭和62年4月30日に試掘調査を実施した結果、かろうじて下部のみを残す奈良・平安時代のものと思われるカマド付きの住居跡1軒が確認され、事業者と協議・調整をしたところ、調査面積が狭いこと(100m²)、遺構の残りが良くないこと(埋土7cm)などの理由により、前橋市教育委員会管理部文化財保護室により発掘調査が実施されることになった。

調査は、5月18~19日の2日間にわたって行われた。住居の規模の確認とカマドの調査を中心であったが、幸い天候にも恵まれ事業者の協力などもあり、スムーズに進めることができた。

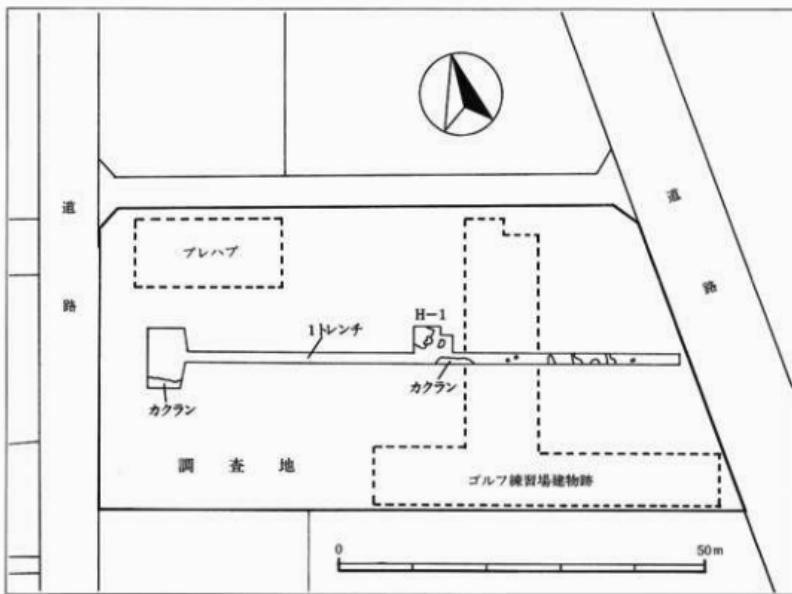


fig.3 総社桜が丘II遺跡調査区域図

IV 層序

本遺跡の遺構確認面はII層であるが、ゴルフ練習場建設の際に高低差のある地形を平坦に削平したらしく、遺構面は、かなり削り込まれていた。

標準土層図は、残りの良い開発予定地の東部分の地層を模式化したものである。

- I層…表土。平らに整地した時の盛土。
- II層…榛名山二ツ岳系の軽石を含む褐色土層。
- III層…浅間山系C軽石を含む砂質黒褐色土層。
- IV層…大小の石を含む黒褐色土。
- V層…ローム層。下部は砂と小石の混ざった層。

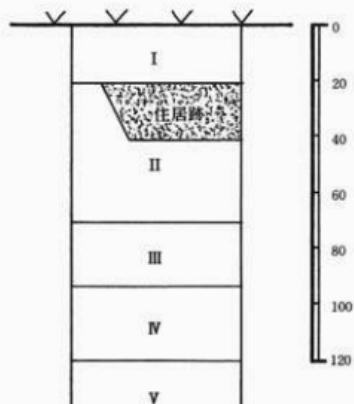


fig.4 標準土層図

V 遺構と遺物

本住居跡は、敷地内中央よりやや北西に寄って位置する。主軸方位はN-9.5°-Eで、壁長は東西方向2.5m、南北3.06mを測る。カマドは東壁をほぼ3:2に分割した南よりに付き、その中心軸は壁軸よりE-10°-S傾いて構築されている。その縁辺は、砂質凝灰岩で固められた堅牢なつくりであるが、遺構残存状況が良くないため、全貌を知ることができなかった。また、南東隅には、方形を呈する貯蔵穴と思われるピット(70cm×62cm)が存在したが、床面下22cmの深さに留どまるものである。床面は堅緻で、約2cmの貼り床がなされていた。

覆土は褐色粗砂にFA・FP・炭化物を混在する自然堆積による1層のみであった。

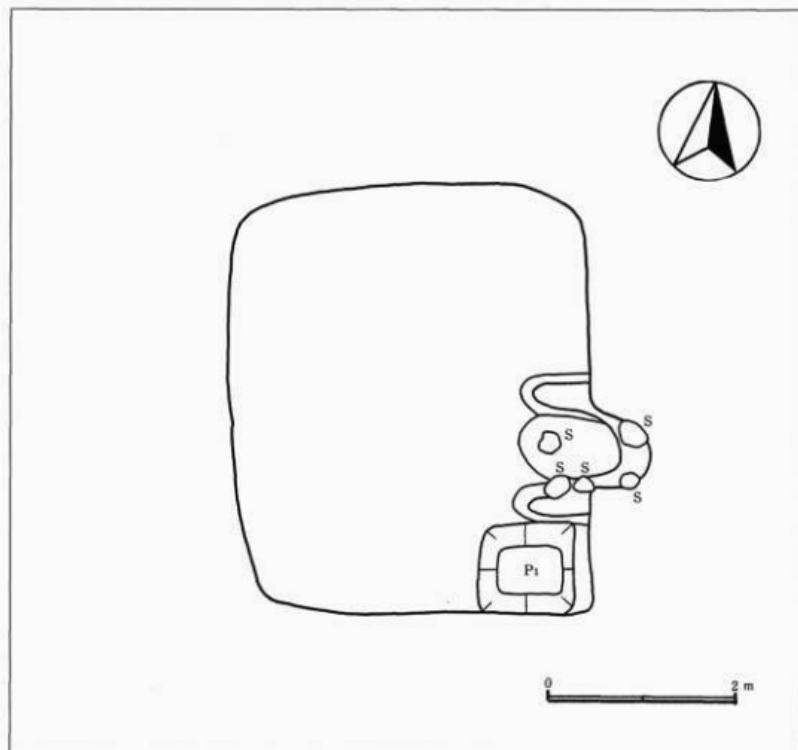


fig.5 H-1 住居跡 (1/60)

出土遺物は、須恵器高台付塊4点である。いずれもカマドまわりから出土したロクロ成形のものである。1点目は推定13.5cmの口径5.5cm・器高を持ち、10YR 8/3浅黄橙色で輝石・石英・軽石・酸化鉄を含む密な胎土で、良好な焼成、残存1/2弱で一部吸炭があり、2点目は推定13.6cm・口径5.25cmの器高を持ち、10YR 8/3の同色で石英・チャートを含む密な胎土、焼成は良好であり、残存約2/3で内外面共に一部吸炭がある。3点目は口径13.2cm・器高5cm（いずれも推定）で、高台部が剥離していた。2.5Y8/2の灰白色を呈し、胎土は密で石英・長石・軽石・酸化鉄を含む良好な焼成。残存1/3である。4点目は、推定14.3cm・口径5.7cmの器高を持つ2.5Y7/2灰黄色で、胎土は密で輝石・石英・軽石を含み、焼成は良好で残存3/4、外面の体部から底部にかけて吸炭があり、一部を欠くものの「田」と思われる墨書がなされていた。

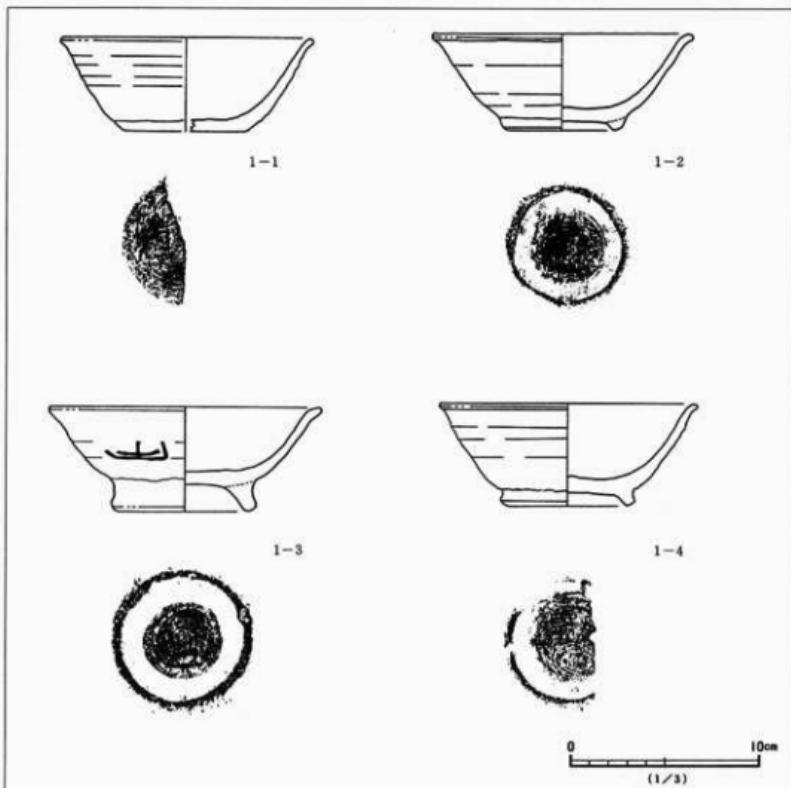


fig. 6 総社桜が丘II遺跡出土遺物 (1/3)

tab.1 総社桜ヶ丘II遺跡出土遺物観察表

No.	登録番号	器種	法量		胎土	色調	成・整形方法		備考
			口径	器高			口・胴部	底部	
1	1-1	高台壇	13.8	5.1	½	密 褐灰	口縁部外反。ロクロ	回転糸切後付高台 ヘラ調整。	高台部離脱。
2	1-2	高台壇	13.8	5.5	¾	密 褐灰 一部吸炭あり	口縁部に向って器内 が薄くなり外反。 ロクロ	回転糸切後付高台 ヘラ調整。	高台部から口縁部まで 程濃色の二次焼成 痕あり。
3	1-3	足高 高台壇	14.7	5.7	¾	砂質 灰白 一部吸炭	端部外反。施成不充 分。二次焼成痕あり。	回転糸切後付高台 ヘラ調整。	外面に「田」(?)の墨書 あり。
4	1-4	高台壇	14.0	5.2	¾	砂質 褐灰	口縁部肉薄。外反 ロクロ、二次焼成痕 あり。	回転糸切後付高台 ヘラ調整。	

VI まとめ

本遺跡は、かつてのゴルフ練習場や工場跡地であったため、その敷地の大半を削平・搅乱されていた。よって僅かに住居跡一軒のみが検出されるに留まり、その埋土も深さ7cmであり、残存状況が良好とは言えない状態であった。しかしながら、昭和59年度調査の桜ヶ丘遺跡との集落形成上、貴重な資料が得られたと言えよう。また、前橋市史第1巻p.146に記載の桜ヶ丘遺跡の項によると、総社町植野の桜ヶ丘団地造成時に樽式土器を伴う住居跡が発見されたという。

すなわち、この地一帯が、少なくとも弥生時代以降は、格好の生活圏であったことが、本調査によって判明し得た。

引用参考文献

- 「前橋市史」第1巻 第2編 古代上 第2節 弥生土器 2 桜ヶ丘遺跡 p 146
- 「総社桜ヶ丘遺跡」 1985 前橋市教育委員会・前橋市埋蔵文化財発掘調査団
- 「柿木遺跡」 1984 前橋市教育委員会

調査要項

遺跡名称 総社桜が丘II 遺跡
遺跡所在地 群馬県前橋市総社町桜が丘1037-1 外6筆
遺跡記号 62A25
調査期日 表面調査 昭和62年4月17日
試掘調査 昭和62年4月30日
発掘調査 昭和62年5月18~19日
調査面積 約500 m²
開発面積 約3300 m²
調査原因 民間開発(宅地分譲)
調査依頼者 前橋市総社町植野841
立見建設株式会社 取締役社長 立見一彦
調査主体者 群馬県前橋市教育委員会 教育長 岡本信正
事務局 管理部長 関口和雄
文化財保護室長 福田紀雄
埋蔵文化財係長 浜田博一
調査担当者 遠藤和夫・新保一美
調査協力 立見建設株式会社・両毛測量株式会社

総社桜が丘II 遺跡 (62A25)

印刷 昭和63年11月10日

発行 昭和63年11月15日

発行者 前橋市教育委員会 前橋市大手町2-12-1

印刷所 株式会社報 通
